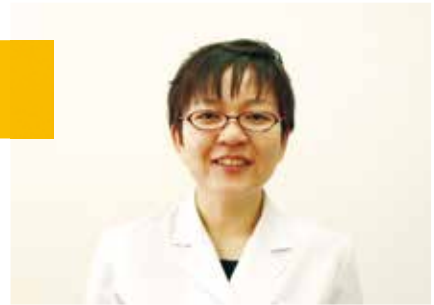


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第17回

株式会社ファーマシー 山根 暁子



「地域包括ケアシステム」という言葉は、医療・介護業界の流行語だ。医療機関の入院設備に大きく依存した現在の看取り体制では、高齢者人口の増加に耐えきれない。こと、「看取り」を視野に入れると、残念ながら介護業界の受け皿としての成熟度は追いついていないと感じてしまう。私たちには、安らかに老いて幸せに死ぬない恐怖が迫っている。

同システムでは、町の診療所や介護施設などが、今の病院の役割を若干、担うことが期待されているとともに各々の高齢者がもっと自立できるコミュニティづくりが叫ばれている。

しかし、本稿を書いている2015年秋の段階で、一般市民に、この概念は、どの程度浸透しているだろうか。大半の人々の正直な気持ちは、「自宅で介護に限界が来たら無理はせず、入院・入所させてほしい」だろうし、在宅療養への移行を求められれば、「病院・施設から追い出された」と多くの患者や家族が困惑するはずだ。

そのような中で私自身と言え、在宅療養支援を行う町の保険薬局の薬剤師として、現状の病床機能のミスマッチと、今後の高齢者人口増加にともなう受け皿の不足に直面し、なんとかしなければならぬと意気込む一方で、一組織の一員で対処するには大きすぎる問題に圧倒され、常にジレンマを抱えている。

*

しかし、何もしなければ何も始まらない。高尚な理想を語っているだけでは物事は進まない。たとえ、砂粒ほどの成果しか見込めなくても動き出さなければ——。そうした思いから立ち上げたのが「在宅ケアカフェ」だ。

「ケアカフェ」は商標登録されている言葉で、北海道旭川市で生まれた。「医療、介護、福祉にかかわる人々

が集って話し合う会」を指す。私の勤務する保険薬局のある広島県福山市には、それに準ずる会がすでに存在していたため、「在宅ケアカフェ」では、「地域住民の在宅医療への敷居を低くする会」をめざしている。コーヒーの香りが漂い、ジャズの流れる中、参加者がゆったりとテーマについて話し合い、人と人とを結ぶ集いにしたいと試行錯誤しながら始め、季節ごとに年4回の開催を目標としている。

まだ会は若く、「在宅医療サービスについて初めて知ることがあった」、「定期的に語り合い、対策を具体化できれば」といったアンケートの回答からもわかるように、情報共有を進めている段階である。厚生労働省が目論む自助・互助力のあるコミュニティとするには道のりは遠いが、回を重ねるにつれ、地域包括支援センターや市の高齢者支援課の職員なども加わり、少しずつ参加者の輪が広がっている。規模はだいぶ違うものの、地域ケア会議に近い役割を果たせているのではないだろうか。

*

現在、介護予防事業は行政主導で動いている。そうした環境下、地域差はあるだろうが、保険薬局は蚊帳の外に置かれているのが実情ではないかと感じる。だが、私たちの先輩たちが守ってきた「町の薬局」は、かつて介護予防の仕事を担当していた。困ったときの駆け込み場所であり、地域住民の集合場所でもあった。今、保険薬局は、「かかりつけ薬局」、「健康サポート薬局」にメタモルフォシス（変化）する変換期を迎えている。「原点回帰」という表現では言い足りない大きな変化だろう。この機会に、行政に甘えず自分たちの力で時代に合わせた姿に変わりたいと思う。志だけは大きく、日々、できることからやっている。